



愛知淑徳大学

ジェンダー・女性学研究所

INSTITUTE FOR GENDER AND WOMEN'S STUDIES
Newsletter

第30号

URL=<http://www2.aasa.ac.jp/org/igws/index.html>発行年月日：2010年10月15日
〒480-1197 愛知県愛知郡長久手町長湫片平9
Phone 0561-62-4111 EX 2498
FAX 0561-63-9308
E-mail : igws@asu.aasa.ac.jp

IGWS 第30号ニュースレターの目次

○ 連続講座『ジェンダーを演じるー装う / 奏でる / 話す』の報告	1
第1回 「『かわいいメンズ』の時代？」	1
第2回 「ロックとジェンダーー逸脱する性をめぐってー」	2
第3回 「おネエキャラのことばーJ-TVにおけるジェンダー・セクシュアリティ」	3
○ 連続講座 学生感想文	4
○ 育児支援制度と仕事	6
○ 子育てと父性・母性	7
○ リンダ・オーハマさん講演会報告 / 第23回定例セミナー開催について	8
○ 日進市男女平等推進情報ボード作成 / ジェンダー研究会活動報告	9
○ ジェンダー関連授業紹介	10

星が丘キャンパスにて、連続講座『ジェンダーを演じるー装う / 奏でる / 話す』(2010年6月5日、12日、19日、全3回)を開催致しました。以下はその概要です。

連続講座

『ジェンダーを演じるー装う / 奏でる / 話す』

第1回
6月5日(土)

「『かわいいメンズ』の時代？」

講師 古賀 令子さん
(文化女子大学服装学部服装社会学科教授)

連続講座の第1回目は、文化女子大学服飾学部服飾社会学科教授の古賀令子さんをお迎えして、「『かわいいメンズ』の時代？」というタイトルで、ご講演いただきました。

戦前の少女文化発祥の「かわいい」は、昨今では消費文化のキーワードとなっている。さらにそれは、女の子のみならず、大人の女性もまきこみながら、さらには男性までも取り込む力となっている。講師の古賀さんは、こうした「かわいい」の流行は、国内のみならず海外へも波及しているという。

たとえば、日本の「kawaii」キャラクターを代表する〈ハローキティ〉のグッズは、パリス・ヒルトン、キャメロン・ディアス、マライア・キャリーといった海外の有名セレブやミュージシャンにも愛用されている。そしてNYのタイムズ・スクエアの中心地にあるサンリオ・ショップでは、星条旗模様の洋服を着た「キティちゃん」が来る人を出迎えている。またパリのデパー

ト〈ギャリ・ラファイエット〉にも、〈ハローキティ〉を核とした日本の「かわいい」ショップがあるなど、まさにキティちゃんは、日本の「かわいい」ファッションを世界に広報して歩く大使であり、いまや世界共通語となった「かわいい」は、日本のポップカルチャーをシンボライズする重要なキーワードとなっている。

こうした中、「かわいいメンズ」という、新たなカテゴリーも登場し、『an・an』誌上では、2006年度より「かわいい男」ランキングが設けられるようになった。「かわいいメンズ・ファッション」の系譜をたどれば、1960年代のビートルズのファッション(サイケデリック、花柄・水玉プリント、フリル)にさかのぼる。その影響を受けた日本の「グループ・サウンズ」。さらに1980年代の「ポパイ少年」、1990年代の「カマ男」「フェミ男」とつづき、ユニセックス志向のメンズ・ファッションは現在ひとつの流れとして定着している。「かつて理想像としてあった、「質実剛健」の

たくましい男性像は消失し、美意識の高いおしゃれな男性イメージが一つの理想像として確立されている」という古賀さんの分析はなるほどだ。

また1980年代日本の若者文化が、“ものまね”であったのに対して、1990年代以降の「かわいい」カルチャーが、日本独自のものであり、注目すべき価値があるという指摘も重要である。しかし2009年3月外務省は、「カワイイ大使」（モデルでロリータファッション界のカリスマ、バンドのリーダーで原宿系ファッションの代表的存在、ブランド制服ショップ「CONOMi」のアドバイザーの3名）を任命した。これが「ストリートの女の子たちが中心になって作りあげてきた「かわいい」モードの帝国」の「大人たちによる侵略」であり、「崩壊」への第一歩となるのか。今回の「「かわいいメンズ」の時代？」と題する講演は、「かわいい」を通

して日本文化の現在を考えさせられる、有意義な90分であった。

（文責 IGWS 運営委員 森井マズミ）



第2回

6月12日(土)

「ロックとジェンダー – 逸脱する性をめぐって –」

講師 井上 貴子さん
(大東文化大学国際関係学部教授)



「ジェンダーを奏でる」と称した今回、講師の井上貴さんは、反体制的な性格を持つロックを性的表象の観点から分析された。井上さんによれば、男性優位のロックは極端な性的表象の手段となっているという。管理されない性、いかえれば通常の男女の社会規範から逸脱した性を担うものとしてロックが存在する。しかし、このことは、逆に、家父長制の性規範の強さを証することにもなっている。

男のホモソーシャルな共同体が同性愛恐怖と女性嫌悪の感情を有していることは、イヴ・セジウィックが説明している（『男同士の絆』）。ロックは伝統的男性共同体の関係性から逸脱し、あえて同性愛と女の領域を侵害していく。例えば女の領域である化粧によって。ただし、洋楽では化粧がセクシュアリティと関係することもあるが、日本のヴィ

ジュアル系バンドでは、化粧するから同性愛だという関連はないようだ。

洋楽ロックの最初のグループは、男性性を誇示するヘヴィメタルの典型である大音響・シャウト・レザー・スタッドを特徴としたジューダス・プリーストである。さらに、奇抜な化粧・衣装に演劇的なパフォーマンスで知られたデヴィッド・ボウイ、ゲイであることで公言するボーイ・ジョージ（カルチャー・クラブ）、火を噴くなど派手なパフォーマンスで有名になったキッス、そして、化粧が本人のセクシュアリティとは無関係なモトリー・クルーへと続く。洋楽ロックを総括すれば、性は過剰である場合と排除される場合があるということだ。

続いて日本のヴィジュアル系ロック・グループに話が移る。まずは鬼メイクと呼ばれ、歌舞伎をパロディ化したカブキロックスを鑑賞。続いてヴィジュアル系の元祖ともいえる美形メイクのX。90年代後半になるとボーイ・ジョージを真似たというIZAM (SHAZNA) が登場する。当時の彼は確かに典型的な美形メイクで可愛かった。井上さんはこうした美形メイクを、拡張された男の美学であり女性性とは無関係だと語る。

では女性ロックと体制との関係はどうなのだろう。井上さんによれば、欧米の女性ロックはフェミニズムとの関わりが深いのが、日本のフェミニストたちはロックをしないようだ。そもそもロック業界は男性優位で、女性はせいぜい歌手役しか与えられない。欧米の女性



ロック歌手（グループ）ではジャニス・ジョプリン、パティ・スミス、ザ・ランナウェイズ、ジョーン・ジェット&ザ・ブラックハーツを鑑賞した。続いて日本の女性ロックでは、草分け的存在であるカルメン・マキ、ガールズを鑑賞。しかし、プリンセス・プリンセスのメンバーがオーディションで選ばれたという事実が物語るように、ここには男性ロックの反体制的性格は全くな

い。日本の女性ロックは、残念ながら、従来のジェンダーを肯定する「普通の女」の音楽にとどまっている。

洋楽ロック5曲、日本ヴィジュアル系ロック4曲、女性ロック7曲を映像付きで鑑賞しながら、性的表象としてのロックの多義性を三つの側面から学んだ、あつという間の1時間半だった。

（文責 IGWS 運営委員 平林美都子）

第3回

6月19日(土)

「おネエキャラのことば—J-TVにおけるジェンダー・セクシュアリティ」

講師 クレア・マリイさん
(津田塾大学学芸学部准教授)



今回の講師オーストラリア人のクレア・マリイさんは、最近バラエティ番組に登場する「おネエキャラ」とそのことばに焦点をあて、ジェンダーとセクシュアリティの観点から分析をされた。「おネエキャラ」とは女性のように着飾ることと、美容、華道、ダンスなどの専門分野で一流であることがセットになっている。女ことばを操り、本物の女性以上に女らしい彼らは一見ジェンダー・異性愛規範を切り抜けるようにみえる存在だが、果たしてどうなのか。

マリイさんによれば、言語イデオロギーは私たちのことばに対する価値観として、何が男にとって、女にとって正しいことば遣いかを規定しているという。また、メディアではしばしばことばについてコメント（メタ言語）がされていること、そしてバラエティ・テレビはリアルにみえるが実際には作られている点を説明された。

「おネエ」の歴史的な変遷を考えると、まずは「おかま」の存在がある。女のようなことば遣いをする「おかま」のことばの存在は、その背景に女性語/男性語という厳格な区別があったことを意味している。1970～80年代には「おかま」としておすぎとピー子が登場した。メディアに掲載された彼らの記事で、「周りが女だらけだったから、自分たちのことを誰もおかしいとは思わなかった」という引用が、おすぎかピー子のいずれが語ったのかは言及されないまま括弧つきになっていることは、メディアが彼らを「おかしい」おかまの「例外」として受容していることを示している。

ゲイ・ブームが到来した1990年代は、おネエことばがゲイ・コミュニティで使用されることばとなる。異性愛規範を問題視し、女性性をパロディ化するゲイ社会において、「おネエことば」の登場は重要だった。主流メディアの中の「おかま」ことばは女性の「真似」であったが、ゲイ社会の中の「おネエことば」は決して「真似」ではなかったのである。

2000年以降に山咲トオルらの「乙女キャラ」を経

て、いよいよおネエキャラが登場。マリイさんによると、おネエことばには乙女キャラにはなかった毒舌があるという。「おネエ MANS」番組をはじめ、いくつものバラエティ番組によっておネエことばは世間に流布し、「女性的なゲイ男性」とMTFトランスジェンダーが話すステレオ・タイプとなっていく。

最後にマリイさんは、『おネエ MANS』の「大変身スペシャル」の映像を見ながら、「おネエキャラ」「おネエキャラのことば」の存在がジェンダー・異性愛規範にどう影響を与えているのかを分析した。この番組は通常の男女の性に分けられない芸人たちが登場するが、「普通」の司会者を登場させることで視聴者には安心感を与え、エンターテインメントとして笑いを取ることに主眼を置いている。鑑賞したテレビは、女らしくない芸人（しずちゃん）を美しく変身させ、「正常な女性性」を身につけて「女」を実感するしずちゃんを強調するところで終了している。多様な性を提示する可能性を孕みつつも、異性愛の規範が強化される可能性もあるわけだ。

講演後は聴衆者からの質問が相次いだ。「おネエキャラのことば」からこのような深い分析ができることに感嘆する講演であった。

（文責 IGWS 運営委員 平林美都子）



連続講座 学生感想文

第1回 「かわいいメンズ」の時代？

鈴木 翔平

今回この講演会に参加して、自分の中の「かわいい」の定義が大きく変わった。私は「かわいい」というものを女性特有の価値観だと思っていたが、昨今ではもっと広義な意味をもつ言葉として使われていることに驚いた。50代の女性向け雑誌に「かわいい」という言葉が多用されていることにも驚いたが、外務省が「カワイイ大使」というものを任命していたことが一番驚いた。まったくもって税金の無駄遣いと思えないが、政府やNHKが動く時点で、この「かわいい」文化が下向線を辿っているという古賀令子先生の説明には合点がいく。何よりショックだったのが、今や、中高年男性においても「かわいい」と言われることに対して抵抗感が希薄になっていることだ。しかもその理由として考えられるのが、若い人に受け入れられたいというのであるから情けない。私は、高校生の時に老人ホームへボランティアに行ったことがある。一緒にボランティアをした同級生の女子が老人に向かって、恥ずかしげも躊躇いもなく「かわいい」と言っていたことに、当時嫌悪感を抱いた。しかし、老人側

にもそのように言われたい気持ちを持っているのかと思うと悲しくなる。

講演会はパワーポイントを使用した発表だったので、わかりやすく疲れることなく聞いた。一番興味深かったのは、「かわいい」文化は昨今急に生まれたものではなく、古くは1960年代のビートルズやグループサウンズから始まり、一昔前では王子と呼ばれる及川光博（ミッチー）や堂本光一、そして近年の〇〇王子ブームとして、形や表現を変えて続いてきたものであるという話だった。また、ギャップによってかわいく見えるという指摘もあり、「かわいい」というのは今や単純な造形の良し悪しを表す言葉ではなく、多様な状況に使える言葉になっていることを知った。今回の講演を聞いて、「かわいい」という言葉はこれから具体的なものを指す表現から、さらに抽象的なものを表す表現にシフトしていくと感じた。

(本学文学部国文学科3年)

第2回 ロックとジェンダー —逸脱する性をめぐって—

中西 奈月

講座に参加する前、そのタイトルに興味をわいたので、少し考えたことがある。

『音楽は国境を越える』と、よくいわれる。言語や、文化を乗り越えて、世界中の人が共通して分かり合えるという様な意味ではないだろうか。では、性はどうか。私の友達には、男性の歌手の曲しか聞かない

という人や、逆に女性歌手でなければ聞いていられないという人もいる。好みの問題もあるが、「この人の歌い方は女らしくて魅力的だよ」、「やはり男らしい歌詞がいい」などという理由を聞かされると複雑な気持ちになった。音楽は、性差を超えられないのだろうか。

洋楽のロックという音楽のジャンルは、反体制的な

性格から、ホモフォビア（同性愛嫌悪）やミソジニー（女性嫌悪）を取って受け入れてきた歴史があることを知った。最初は男性優位のロックだったものが、少しずつ進化していくような印象を受けた。ロックは日ごろからよく聴いていたが、井上先生のお話を聞き、今までとは少し違う視点からも聴くようになった。

次にヴィジュアル系と化粧について、お話があった。化粧は女性の文化ではなく、自分とは違う何かを演じるためのものであり、セクシュアリティと化粧は断絶され、化粧をすることにより拡張された男の美学が生まれる。まさしく、性的逸脱である。また、女性のロックには、女性性を廃したルックス、独立・自立した強

い女性のイメージも確立されていったという。しかし、日本では女性はあくまでファンであり（演奏する側でない）、ガールズバンドの成功の難しさや、男性優位のロック業界の話に、悔しく思った。とかく日本はそういった流れに乗るのが遅い気がしてならない。

女性とロックについて、音楽と性についてまだまだ乗り越えるべき壁があることや、歴史について知ることができた。私も音楽をする人間なので、音楽と性について、考えをよりいっそう深めていきたい。

（本学福祉貢献学部1年）

第3回

おネエキャラのこぼれ —J-TVにおけるジェンダー/セクシュアリティ

櫻井 優子

私が今回この連続講座に参加したのは、4月から受けている「男性学・女性学」の授業で紹介されたチラシがきっかけでした。第1回と2回の講座は私用のために出席を断念し、第3回だけでも参加しました。

まず驚いたのはクレア・マリィ先生の流暢な日本語と、話の内容の斬新なことです。TVや芸能関係に疎い私ですが、マリィ先生が連発する「おネエ」顔負けの「おネエ言葉」に教室が沸くたびに、私も興味深く聞いていました。最近耳にする「おネエ言葉」は、私たちに新鮮さと親しみのある印象を与えますが、その言葉が登場する背景には長い時間があつたことにも驚きました。

私が生まれたのは1990年代で、幼稚園の頃には「オカマ、オカマ！」という言葉を使って遊んでいた時代でした。現在ではTVでも「ちょっと女性っぽい男性」をよく見かけるようになりました。初めは“馴染みのない個性”を持ったタレントの登場に、少々とまどっていました。私にとってはつかみどころのない、「不自然な」存在に思えたからです。

しかし最近ではその中でもカリスマ的存在、あるいは強烈なインパクトを与える存在として取り上げられ

てきたタレントたちにより、彼ら/彼女らに対する世間の見方が確実に変わってきています。男でもなく女でもない、でもときに激しく、ときにしなやかに周囲を沸かしたる力が“世間に愛される存在”になってきたのです。そしてそのギャップに加えて男性的とも女性的とも言い難い中性的な彼らの感性が、見た目にも雰囲気としても一般の聴衆に、より男性らしさ・女性らしさを印象付けているのです。

講演の最後の質問にもあつたように、こうした華やかな芸能界の一方で、一般社会という現実が存在します。彼ら、ゲイに対してどう感じているのかという私自身の意識はあやふやなままです。時代の最先端を駆ける夢の世界と現実の世界では、また違った意識・感覚があるのだと感じています。

J-TVにジェンダーを学ぶことの面白さと、現実との相違を知ることの出来た講演でした。これからはTVの世界と現実世界と両方に視野を広げ、より興味を持ってジェンダーを勉強していけたらと思います。

（本学文化創造学部2年）

育児支援制度と仕事



飯田 貴子

私が大学を卒業したのは、バブル経済の終わり頃でした。入学時から図書館司書を志望していた私は、司書の採用試験を受け、希望していた大学図書館の職員になることができました。当時は好きな仕事で定年まで働き、結婚をしなかったとしても生活はできる！など考えていましたが、6年後にまさか自分が結婚し、住み慣れた名古屋を離れることになるとは、夢にも思いませんでした。

結婚することが決まった直後、結婚相手が関東へ転勤することが決まりました。私も関東の大学へ転勤希望を出すか、仕事を辞めるか、かなり悩みました。仕事がおもしろく、自分なりのやり方がやっとなつかめてきた時期だったので、なんとかして仕事を続けたいと異動願を出しました。上司の方々のご尽力のおかげで、異動することができ、現在の職場で仕事を続けています。

結婚して3年半後、第1子を出産しました。私の職場では、国家公務員に準じる育児休業制度を採用していたため、当時の産休は産前4週、産後6週間、育児休業は子どもの1歳の誕生日の前日まででした。たった1年！と思いましたが、それでも、職場の女性の先輩方からは、ずいぶんうらやましがられました。私が育児休業に入った半年後、制度の改正があり、育児部分休業は子どもが3歳に達するまでに取得できることになりました。そこで申請した期間を延長し、1歳4カ月まで取り、仕事上きりがよい新年度から職場復帰することにしました。

子どもはありがたいことに丈夫な子でしたが、それでも保育園に入園したとたん、発熱や流行性の病気にかかることがたびたびありました。そのたびに、比較的休暇が取りやすい私が仕事を休んで看病をすることになります。1～2日で登園できるようになればよいほうで、症状が長引いたり、出席停止期間が定められている病気の場合は、名古屋に住む実家の母に何度も応援を頼み、きりぬけました。休暇は年に20日ありますが、毎年のようにぎりぎりまで休むことになってしまいます。仕事はたまる、職場には迷惑をかけてしまう、休暇が足りないと、休みが重なるたび、ハラハラ、イライラ、ドキドキしました。小学校に入るまで

は看護休暇で年に5日取得できる制度があり、本当に助かりました。現在、第1子が小学校3年生、第2子が4歳です。この10年ほどの間に、育児休業の制度は何度か改正され、働く女性にとってはありがたい制度となってきています。幸い、私は職場が育児休業の取得に積極的で、子育て経験の女性職員が多いため、理解も得やすく、2回の産休と育児休業を取得しました。そして現在も育児部分休業を申請し、一日1時間、勤務時間を短くして勤務しています。

育児支援は職場や住んでいる自治体により、かなり差があります。私の職場は制度としては、かなり恵まれています。住んでいる市の制度は整備されています。すべての人が満足できる制度にすることは難しいでしょうが、働くお母さんが多い今の時代、制度のさらなる整備を願っています。出産年齢が高くなり、同じように祖父母の年齢も高くなっています。高齢の祖父母を頼ることができない家庭も周りで増えています。保育園時代に比べると病気等は減るものの、学校の行事、代休、そして夏休み等の長期休業があります。さらに昨年はインフルエンザによる学級閉鎖で、頭が痛い日が続きました。制度に甘えているような状況ですが、私のように地元を離れている核家族にとっては、子育て支援の制度がなければやっていけません。

私は、企業等で勤務されている方に比べると、かなり子育て環境に恵まれていると思います。まだまだ子育て期間が続く私ですが、もう少し子どもが大きくなり、手が離れるようになったら、次の育児世代の同僚たちが少しでも働きやすい環境を整えてあげられるようにしていきたいと思っています。

今は、毎日どたばた生活が続いていますが、私が元気で楽しく過ごせているのも、好きな仕事にぎやかな家族のおかげだと思っています。仕事と家庭の2つの生活は、たいへんなことも多いですが、職場でのストレスは家庭で、家庭でのストレスは職場で、うまい具合にバランスが取れば、忙しいのも悪くはないかと、過ごしています。

(本学文学部図書館情報学科 1992年卒業
現在大学図書館勤務)

子育てと父性・母性



中野 靖彦

子育ては母親の役割と言われたのは、いつ頃からだろうか。例えば江戸時代では、男の子は跡取りとして父親が、女の子はお嫁にいくものとして母親が躰（たが）いて、父親と母親の子育ての役割が比較的はっきりしていたとも言える。子どももそれが当たり前であり、親の価値観がそのまま子どもに引き継がれた時代でもあった。

しかしながら、時代とともに、子育てについても大きく変化してきた。少子化や核家族化が進み、経済的な発展によって社会全体が豊かになった。社会的にも経済的にも恵まれ、子どもが少なければ、親はゆとりを持って子育てに専念できるはずであるが、そうはならなかった。親自身が子育てから多くを学ぶ機会が少なくなり、子どもに愛情を注ぎ過ぎるか注がないかの極端なケースもでてきたのである。

いま親による体罰や虐待が相変わらず後をたたず、育児放棄を思わせる事件があると、母性の欠如が指摘され、子育ての中心的な役割を担っている母親が矢面に立たされている。男性は社会で活躍し、子育ては女性という社会風潮の流れの中で、母親は、毎日、家庭内で子どもと顔を合わせているうちにストレスが溜まり、その予先が子どもに向けられたのである。虐待という悲しい事態を起こすこともある。もし、夫婦間でコミュニケーションがうまく取れて、協力していけば何事もなく過ぎていくことも多い。

社会も大きく変化し、女性も職を持ち、社会進出の機会が多くなった。子どもを産まないか、産むかの選択を迫られると同時に、産んで、子どもをどう育てるか悩む。最近、「改正育児・介護休業法」が施行され、父親も育児休暇が容易に取れるようになった。「イクメン」の誕生である。しかし、実際にイクメンは2.7%前後であるようだ。また最近では企業業績の悪化で、女性の育児休暇を取る割合が減少し、イクメンも減ったと言う。このままいけば、さらに減るのは目にみえている。

また、育児休暇が制度として保障されても、自分が休めば他人に迷惑がかかる、リストラにあうかも知れないという一抹の不安があれば制度を利用しづらい。会社人間として夢中で働いてきた男性にとって、育児のために休暇が取れると言われても、心の切り替えは容易ではないと想像できる。職場の方が安心できるという男の本音も耳にすると、子どもと1日中、顔を合わせるこの不安や自信のなさからの脱皮には時間が

かかりそうだ。

人には持って生まれた性があり、その役割もある。男性は自分のお乳をあげることはできない。しかし幼い子どもでも両親と遊ぶ時には違いを見せる。特に男の子が父親とボール投げをする時、スピードはコントロールしないし思いっきり投げる。ところが母親だと力をセーブし、スピードを落とす。幼い子どもが、遊び相手の性を気遣っているのである。子どもにとって、お父さんは男性であり、お母さんは女性である。

こうして子どもは、相手や自分の性、立場も意識しながら成長するが、優しく、丁寧に育てられた子どもは大人や親の期待に背かないよう、人間関係を壊さないよう苦慮する。特に優しく育った男の子は、草食系の男性へと成長するのかも知れない。優しさは大切ではあるが、草食系という言葉の裏には、男性には男性らしくなって欲しい願望も含まれている気がする。

しかしながら、社会構造がさらに複雑化する中で、男女とも仕事を持ちながら子どもを育てるには、父親には父性（「子どもには自分の意志で決断させる」等）を、母親には母性（「子どもの日々の小さな変化にもすぐ気がつく」等）が必要と考えるのではなく、両親とも父性、母性の双方を備えることが子育てには大切となる。特に、単身赴任とか、事情があって別々に生活しながら一人で子育てをしなければならない家庭環境においては、尚更、父性、母性のバランスが重要である（藤井・石田・中野）。

父親も母親も、時には母性を、また必要に応じて父性を発揮しながら子どもと対座することで、子どもも両性的なものを身につける。それを引き継いで成長していけば、大人になって家庭を築いてもしっかり役割を担える親になりえる。イクメンも増える。

さらに親として共通に備えた親性（汐見稔幸）や、親も含めて、皆で子どもを育てようという育児性（「親が注意することは親自身も守っている」等、大日向雅美）という、もっと広く育児を捉える見方もある。

「子どもは大人社会を映す鏡である」と言われている。子どもには元気で、たくましく育てたいと願うなら、男性・女性、父親・母親といった性や役割の前に、人として、子どもとどう係わるか見つめ直してみる必要がある。子育ては、正に、親としての生き方、人としての生き方そのものと言えよう。

（本学文学部教育学科教授）



リンダ・オーハマさん講演会

礎を求めることの重要性

後藤由起子

カナダ出身の映画監督であるリンダ・オーハマさんは、前年の講演で visible minority である日本人移民のルーツやアイデンティティを模索するテーマを扱った自作映画『おばあちゃんのガーデン』を紹介した。今年も同様のテーマで、『礎—ISHIZUE—』という新作のドキュメンタリー映画を上演された。

この映画は、Chibi Taiko に所属する 13 人の日系 4 世 5 世の少年少女たちが太鼓の練習を兼ね、自分たちのルーツのひとつである日本を訪問した 10 日間の様子を追っている。ちび太鼓のメンバーの子どもたちの顔を見てみると、4 世 5 世とはいえ、いわゆる白人とは違う。このような人々をリンダさんは visible minority = 目に見えて民族性が分かる人たちと呼んでいた。彼らは生まれ故郷のカナダにいと、白人系カナダ人の人々と髪の色や瞳の色が違う。その違いを生むルーツである日本に来れば、そこでは髪や瞳の色は同じだが、またどこか違うという感覚に襲われる。太鼓の練習の合間に、彼らはリンダさんの祖母の故郷である広島県尾道市で日本の文化や人に触れ、とても価値のある体験をしたようだ。

映画の中で「日本ではバンクーバー、バンクーバーでは日本を感じる」というリンダさんの孫の言葉は印象的だった。これは「ハイブリッド」の経験がないと分からない感覚ではある。だが、ルーツを大事にしなくてはならないのは誰に対しても言えることだ、とリンダさんは言う。もし私が自分のルーツをどこまで知っているかと問われると、せいぜい 2、3 代前、それも身近なうわべの話ぐらいしか知らないであろう。この映画を見ていると、ちび太鼓のメンバーの方が私よりもっと日本を知り、日本を体験しているような気がした。そもそも日本とはどのような国なのかと尋ねられたとしても、私には明確に答えることができないだろう。今回はっきり自覚したことは、自分が日本人だと

いえども伝統的な日本文化を引き継いでいないかもしれないという焦りのような思いである。ちび太鼓メンバーを受け入れた尾道の方たちは、異文化を持つ人々をもてなすことで、日本文化を客観的に見つめなおし、再認識できたのではないだろうか。さらに、戦後の世界で起こった移民の人種問題という、あまり知られていない歴史を次世代へ語り継げる機会となったのではないだろうか。『礎』という映画は我々に様々な期待や疑問を提起してくれる素晴らしい映画である。

現在はグローバル化の名の下に、様々な人種の人々が様々な国で生活している。多国籍、多文化であるアメリカの 'melting pot' という思想が、'salad bowl' に変わっていったように、自分の独自のルーツを知り、理解することが重要だとリンダさんは言った。日本に住む日本人でも自分のルーツを知ることが自己を形成する上で非常に力強いものになるであろう。そして、また次の世代へ自分の礎になっている文化を引き継いでいくことで、世界（他者）に自分が何者か説明できる自信をも引き継ぐことになるのではないだろうか。日系 4 世 5 世も含め、自分が属するそれぞれの文化に誇りが持てるように文化を引き継いでいく重要性を今回痛感した。

(文責 本学グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科 2 年)



第23回 定例セミナー開催について

さる 10 月 11 日 (月 / 祝日) 長久手キャンパス 8 号棟 811 教室において、講師に岡崎勝さん (名古屋市立桃山小学校教員) をお招きして、ジェンダー・女性学研究所主催 第 23 回定例セミナー

『家事・育児はほんとうに楽しいか？—男が試されるとき、女が試されるとき—』

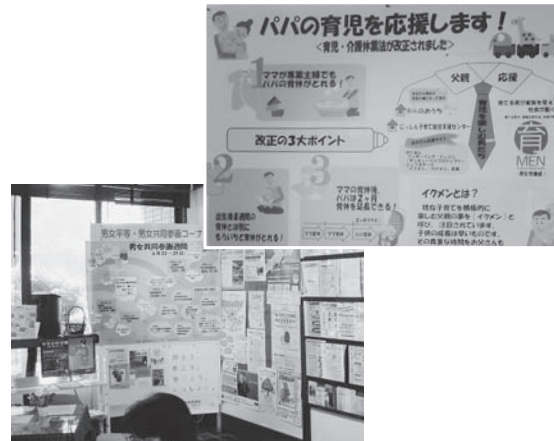
を開催致しました。講演会につきましては、ニュースレター 31 号でご報告致します。

日進市男女平等推進情報ボードを作成しています!

本学ジェンダー・女性学研究所は日進市役所市民協働課から、「男女平等・男女共同参画」に関する情報ボード制作の業務を委託されました。委託期間は、2010年4月1日から2011年2月28日までで、情報ボードは、市役所構内にある「にぎわい交流館」の1階に設置されています。情報ボードには、テーマごとの市民向け啓発資料と、ジェンダー・男女平等に関する書籍などの紹介記事を掲載しています。資料の内容は、あらかじめ5つのテーマに絞られ、2か月毎に掲示されることになっています。

情報ボード掲載テーマ

- 2010年6月 男女共同参画
- 8月 育児・介護休業法
- 10月 ワーク・ライフ・バランス
- 12月 ドメスティック・バイオレンス
- 2011年2月 女性と介護



情報ボード作成には、本学メディアプロデュース学部の学生に協力して頂いています。

ジェンダー研究会 / 映画鑑賞会に参加して

堀井 友晶

8月9日にジェンダー研究会による映画鑑賞会を行いました。視聴したのは「ココ・アヴァン・シャネル」という、世界的ファッションデザイナー、ココ・シャネルの生い立ちを描いた伝記作品で、孤児院育ちの少女が、世界中で人気のブランド“シャネル”を生み出し成功を収めるまでの道のりを描いたものでした。

この作品をジェンダー的観点から鑑賞しました。作中に「邪魔な羽は捕らない」というココの台詞が出てきます。しかし、ココを慕っている女優は、「飾らないと貧乏人みたいだわ」と反論します。当時の女性というのは、美しく飾り立てなければ男性に見てもらえないと思込んでおり、男性も、女性は自分を際立たせる‘飾り’と認識していたようです。そんな時代の中でココは、「ヒールのない靴、コルセットのない服、羽飾りのない帽子」を身にまとうことで、時代に反発し、「地味」、「女性らしくない」と周りから言われます。しかしそこには、機能的で簡素な様式美がありました。

また「私は誰とも結婚せず自分で働き、自立する」というココの台詞が出てきます。それに対して男性は、「女性に向いている仕事はない」と半ば怒ったような命令口調で切り捨てます。これは当時の男性が、「仕

事は男性の領分」と考えていたのではないかと感じました。だから女性が働くということに、全くと言っていいほど理解が得られないのだと思いました。しかしココは、宣言通りファッションデザイナーとなって、スポットライトを浴びることになります。

ココ・シャネルという女性は、確かに、常に希望や野心を忘れない強い心を持ち、周囲に何かを求め続けていきます。それは彼女が、自分が何をしたいのか、何を欲しているのかを常に考えているからです。彼女は女性だからという縛りを意識せず、人を観察し、本を読み、知識を得て、たとえそれが時代の流れに逆らっていても、結婚をせず、働くことで自立を求めます。生涯その生き方を貫いた彼女を、私は尊敬します。

(ジェンダー研究会会員)



愛知淑徳大学、ジェンダー・女性学関連の授業紹介

2010年度後期

開放講座

女性学・男性学(長久手)
講師 / 中島美幸

聴講・科目等履修(学外向け)

ジェンダー論(長久手)
講師 / 石田好江 小川明子
小久保潤子

ビジネスと社会(星が丘)
講師 / 原山恵子

ビジネスとジェンダーⅡ(星が丘)
講師 / 原山恵子

*申込み受付期間は既に終了致しました。

2011年度前期開講予定

開放講座

女性学・男性学(長久手 / 星が丘)

聴講・科目等履修(学外向け)

ジェンダー論(集中・星が丘)
*2011年2月初旬より申し込み開始です。

<問い合わせ先> 教務事務室
〒480-1197 愛知郡長久手町長湫字片平9
TEL: 0561-62-4111(代表)
FAX: 0561-63-1844
受付時間: 土・日・祝日を除く9:00~17:00
<http://www.aasa.ac.jp/faculty/kamoku/index.html>

*講師、開講名など変更になる場合があります。
*詳細につきましては、次号31号にてお知らせ致します。

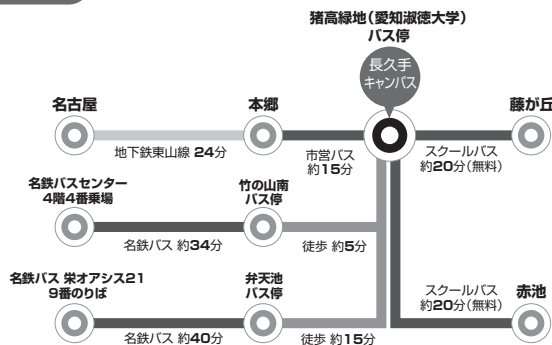
施設利用案内

どなたでもお気軽にお立ち寄り下さい。一人でもお友だちと一緒にでも大歓迎です!

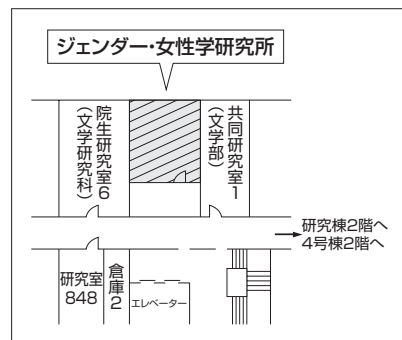
開室日 毎週月曜日～金曜日 **開室時間** 9:00～17:00

場所 愛知淑徳大学長久手キャンパス8号棟 4階

案内図



■長久手キャンパス8号棟 4階



編集後記

今年度前半は「ジェンダーを演じる」と題した連続講座を開催し、多彩なアプローチからジェンダーの表象について考えてみました。後半、10月11日(月/祝)開催の第23回定例セミナー「家事・育児は本当に楽しいか」(講師岡崎勝さん)の講演概要につきましては次号でご報告させていただきます。

なお、本年度より学部再編に伴い運営委員の先生が増員されました。より多角的な視野で活動を展開できたらと考えています。

(高橋 博子)

ASU・IGWS2010年度

運営委員

平林美都子(所長兼) 石田好江 國信潤子
酒井昌代 佐藤実芳 菅野育子 棚橋昌子
森井マサミ 米倉五郎 若松孝司

事務担当

高橋博子